

■殿様日記 vol.2 癸巳 宗徧流お初釜

平成25年睦月

平成25年1月14日、茶道宗徧流山田家新春初釜にお招きを頂き、私たち夫婦は有難くお受けすることにした。当日の天気予報はあいにくの雨、関東地方はところにより雪であった。

お家元邸は鎌倉の浄明寺近くにあり、私の自宅からはタクシーで15分ぐらいのところである。出かける頃には雨であったのが鎌倉に向かうにつれて白いものが混ざり、鎌倉市内のお屋敷の屋根は朝から降り続いていたのか、もうすでに雪が積もっていた。

お家元のお玄関で新年の御挨拶を交わし、お待合に飾られていたお道具をしばし眺める。御軸は「雪中」が掛けられていた。初めは別の掛け軸であったものが朝からの雪で急遽「雪中」に掛け替えられたとか。素晴らしい御趣向である。

同席の方々とお話をしながらお茶室への御案内を待っていると間もなくご案内があり、お待合の外に出るとお庭一面に雪が降り積もり得も言われぬ美しさである。一瞬寒さを忘れてその景色に見入ってしまい、長年住んでいた京都の冬を思い出していた。



↑宗徧流初釜にて



↑宗徧流家元邸内庭



↑雪の止観亭（奥）

止観亭のお茶室へ続く飛び石は、そこだけ箒で雪を払いのけてある心配りである。黒紋付き、袴姿の男性が傘のかわりに編笠を両手でかざし、私たちをお茶室へ先導して下さい。

止観亭は以前京都にあり、一條家、醍醐家に引き継がれ、現在はこの宗徧流山田家のお庭に移築され、国の重要文化財となっている。千利休の妙喜庵、織田有楽斎の如庵は共に国宝であるが、その次に続くものと言

えば、^{けいかんさんそう}恵観山荘茶室（止観亭）と言われる名茶室である。

この止観亭ではお家元のお点前で、お家元自らお道具のお話を静かにされるのを伺いながらお正客としてお濃茶を頂いた。静寂の中お湯がたぎる音だけが聞こえ、時折降り積もった雪に耐えかねた木の枝がバシッと折れる大きな音が静寂を破る。まこと、わびさびの境地に身を置いている気がした。

止観亭を退出し^{しぐれせき}時雨席に移動するときの御案内は女性の方であった。編笠を持つ袖から両腕が吹き殴る大雪にさらされていたので、思わず「冷たくございませんか？」と伺っていた。

時雨席では朱塗りの盃で乾杯をさせて頂き、おいしいお料理を頂戴した。お家元夫人からお床の間の掛け軸のご説明があった。富士の絵とそれに添えられたお歌の作者は松平定信公との事。私は白河藩主松平定信公と長岡藩主9代^{ただきよ}忠精公はお互いに老中で大変親しく、よく幕府の運営改革について話し合った間柄であった事。定信公の姫、^{えんひめ}婉姫は9代忠精公の長男^{ただしず}忠鎮の正室であったが、残念ながら忠鎮が早世した事をご披露した。また、定信公のご子孫は現在逗子に在住であり、私の^{またいとこ}又従兄弟なので時折お目にかかっていることもお話しさせて頂いた。

お腹もいっぱいになった後は最後に薄茶^{りきいせき}の力囲席^{りゅうれい}である。ここは立礼で私たち夫婦はお正客、お次客としてお茶室からガラス障子越しに雪のお庭を眺める事が出来る素晴らしいお席に案内された。



↑薄茶席

お点前は愚息忠慈である。初釜ではいつもこのお席で愚息のお点前を頂いている。愚息も以前に比べると少し余裕が感じられる。親子の対面ではないが、これほど晴れがましくうれしいことはない。お席主は長岡支部の桑原宗夏先生で、絶えず気配りをして頂きこの上ない至福の時を過ごした。

愚息が茶道の道に入ってから日頃は松永宗亨先生に熱心に御指導を頂き、お家元をはじめ皆様には温かいお計らいを頂き心より感謝している。

長岡では屋根の雪降ろしをしなければならない状態で、皆が大雪に苦勞をしているというのに、所変わって鎌倉ではたまさかの雪を風雅と感じる。長岡の方には申し訳ないがと思いながら、雪の降りしきるなか帰途についた。



↑薄茶席での忠慈